Seigaku-In Schools
SEIG

聖学院 NEWSLETTER

聖学院だより　特別号

2008年3月　発行

編集・発行＝聖学院広報センター
〒114-8574　東京都北区中里2-9-5　☎03-3917-8530　FAX 03-3917-5839　E-mail pr@seig.ac.jp　URL http://www.seig.ac.jp/

コントラクト（契約）ではなくコヴェナント（聖約）
――日本社会の再構造化――

聖学院理事長
大木　英夫 Ph.D.,LL.D.,D.D.

大木英夫理事長

日本社会の倫理的崩壊と教育課題

英国の前首相ブレア氏は教育を政治の第一課題に掲げました。安倍前首相もそうしました。ところが最近、安部氏が始めた「教育再生会議」が解散されてしまいました。或る新聞は「安倍氏と共に去りぬ」という社説を掲載しました。安部内閣メンバーの倫理問題がつぎつぎ出、ついに内閣もろとも国民の批判の風と共に去って行きました。この社説はその終わりを「寂しい幕切れ」としめくくりました。

聖学院は、第三ミレニアムの開始と共に、自主的に法人内教職員全体をもって「聖学院教育会議」を開き、「聖学院教育憲章」を採択しました。昨年からは第二次教育会議を準備し、そしてこの三月末に全体会議を開こうとしています。それは最近の世相が示しているように、日本社会の倫理的基盤がくずれ、まさに泥流化しているからであります。清水寺の僧侶が「偽」の一字をもって喝破したとおりであります。

しかし聖学院は評論するのでも喝破するのでもない、その教育問題の最前線から逃亡するのではない、そうではなくて、みずからを改革しつつ、その問題の解決に取り組もうとしているのであります。「教育が国家の問題となった」というよりは、教育が逆に国家の問題と取り組まねばならなくなっているのです。安倍氏のようにこの倫理的深層の崩壊を「美しい国」という言葉で偽装するのではなく、教育が力をこめて日本の戦後社会の深層構造の問題に照準を合わせ、そして日本社会の「再構造化」という課題と取り組まねばならないと思うからであります。

＊

コントラクト（契約）からコヴェナント（聖約）へ

なぜ日本社会は「再構造化」が必要なのでしょうか。敗戦後、新しい憲法のもとで日本社会は構造的大変化を経てまいりました。「中根千枝」という名前をご存知でしょうか。東大最初の女性教授であり文化勲章を受賞した社会学者です。中根氏が書いた『タテ社会の人間関係』という書は、今なお版を重ねているベストセラーの一つです。それは古い日本社会を「タテ社会」構造として捉え、新しい日本国憲法によって成立した日本社会を「ヨコ社会」構造として構造変化して行くことを示した書です。中根氏は「ヨコ」の原理を「コントラクト」(契約)という言葉で言い表しました。男女は同権、結婚は両性の合意による、こういう思想によって戦後の日本社会は「タテ」から「ヨコ」へと大変化をとげてまいりました。こうして過去60年、もしあの戦前を「死」の覚悟の時代とすれば、戦後は「生」の享楽の時代ということができるでしょう。しかし、この新しい社会の原理がその中に社会崩壊の原因を含んでいることを誰か知っていたでしょうか。その変化が崩壊の原因であると誰が気づいたでしょうか。

かつて最高裁長官であった藤林益三という方が「契約」について一冊の本を書きました。しかし、それは聖書の中に出てくる「契約」についてであります。藤林氏は内村鑑三の流れを汲むクリスチャンでした。その「契約」とは旧約聖書と新約聖書の「約」（契約）は「コントラクト」と言えば誤解を招きます。聖書の「契約」は、英語では「コヴェナント」となります。「コントラクト」は今日商取引に用いられるから「商約」と訳すことができるでしょう。それに対して「コヴェナント」はどう訳したらよいか、その区別を明らかにするために、聖学院教育会議では「聖約」という言葉を造り出しました。「聖約」「コヴェナント」とは、聖書では神との垂直次元の約束関係を意味します。これまでは聖書の訳語としても「契約」という言葉が用いられてきましたが、それは「ヨコ」関係ではなく「タテ」関係の聖約であります。社会の基本単位である結婚家庭を「コントラクト」、つまり「商約」的コントラクトと同列に理解してよいでしょうか。キリスト教的結婚式は、神の前での聖なる契約、つまり「聖約」であります。古い「タテ」関係から「ヨコ」関係への構造変化だけではなくて、「新しいタテ構造」へと再構築されねばならないのであります。結婚家庭は土橋のようではない、たしかに人の肉体は土からで土に帰ります。「土橋」（創世記はアダムは「土〔アダマー〕から」造られたと言う）のようではなく、「吊橋」のように垂直次元（創世記は「神のスピリット」によって生きる者と記している）によって支えられねばならないからであります。戦後日本社会の脆弱さは、古いタテ構造からヨコ倒しにしただけで、新しいタテ構造へと再構造化されないままできたからであります。

「商約」の背後にも「聖約」がなければならないのではないでしょうか。聖約によって心に倫理性をもっていなければ、商約も詐欺的になるのではないでしょうか。なぜ社会学者マックス・ヴェーバーが「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」というキリスト教と資本主義の関係を言うのでしょうか。そこに構造的欠陥があれば、「偽」の原因となるのであります。

＊

キリスト教教育の再建による社会の再構造化

もっと重大な問題があります。それは最高学府であるわが国の国立大学の造り方に出てまいります。それはドイツの大学をモデルとしたものでしたが、そこに顕著な違いがありました。それは伝統的な神学部を切り捨て、そして伝統的大学にはなかった工学部をつけたことでした。神学は中世時代には「諸学の女王」という位置をもっていました。それを切除したことが近代日本の文化的基礎の問題の発生源となるのであります。その問題に直面したのがガイ博士とともに男子の聖学院の創立者となった石川角次郎先生です。石川角次郎は東京帝国大学の法学部の学生でした。当時の東京帝国大学総長は加藤弘之でした。当時の評論家山路愛山は「東京大学派と基督教教会」との論争について、外来の啓蒙主義的加藤弘之らを評し人間の内面に潜む「大要求」を知らないと言いました。まさに石川角次郎は、その「大要求」をもつ学生であって、この総長とぶつかり、そして退学し、アメリカへ留学しました。帰国して学習

院教授となりましたがその職をも捨て、日本の若い世代からキリスト教教育が必要と決意し、聖学院を創設したのであります。日本の近代文化に潜む重大問題は、敗戦後の東京の外面的焼け野原としてだけでなく、今や内面の崩壊となって現れ出ているのであります。

石川角次郎の聖学院開設から百年たって、なぜ聖学院は全教職員による教育会議をもって、日本の教育再建にさきがけ、この日本の社会構造崩壊をその根底から再構造化する大課題と取り組むか、その理由をまず聖学院関係者すべてにご理解を頂きたいと思うのです。そしてご支援を賜りたいと願うのであります。

女子聖学院の創設者クローソン先生は、「わたしの子供たちが真理のうちを歩いていることを聞く以上に、大きい喜びはない」（ヨハネ第三の手紙）という言葉に思いを託しました。聖学院大学と大学院、また総合研究所はラテン語で「ピエタス・エト・スキエンチア」（敬度と学問）を標語とします。聖学院全体は男子聖学院の校歌にある「真善美」を「聖」という垂直次元において総合する、そういうキリスト教教育の再建のため、まず教職員全体が聖約共同体となって、今日の国家的課題に取り組んで行こうとしているのであります。